2025年3月18日

親鸞仏教センター定例講座

「『歎異抄』思想の解明」第Ⅲ期・第3回（通算第23回）

第四章――浄土の慈悲（3）

加来 雄之（親鸞仏教センター副所長）

『歎異抄』第四章（加来試訳）

『歎異抄』第四章	加来試訳
四 一 **①慈悲に聖道・浄土のかはりめあり。** **②聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐゝむなり。** **③しかれども、おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。** **④浄土の慈悲といふは、念佛していそぎ佛になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。** **⑤今生に、いかにいとをし不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。** **⑥しかれば念仏まふすのみぞ、すえとをりたる大慈悲心にてさふらうべきと** **⑦云々。**	第四章 【主題の提示】 ①慈悲には、〔自力〕聖道〔門の立場から、他力〕浄土〔門の立場へ〕の変わりめがあります。 【「聖道の慈悲」について】 ②聖道〔門〕の慈悲というのは、〔この現世で自力によって〕人を、あわれみ、可愛がり、はぐくみ育てていこうとすることです。 ③けれども、思いのままに助けとげるということは、きわめて実現が難しいのです。 【「浄土の慈悲」について】 ④浄土〔門〕の慈悲というのは、念仏して、いそぎ仏となって、大いなる慈と大いなる悲の心によって、思うがままに生きとし生けるものを利益することをいうはずなです。 【「かわりめあり」について】 ⑤今の〔迷いの〕生にあっては、どんなにいとおしいと思い、不便だと思ってみても、自分の意のままに助けることはできないので、このような慈悲は始めも終わりもないのだ。 ⑥そうしてみると、念仏もうすことだけが、最後まで徹底した大いなる慈悲の心でありましょう、 ⑦と〔故親鸞聖人は〕教えてくださいました。

Ⅰ　本日の課題

・②③「聖道の慈悲」とはどのような慈悲であるかを、④「浄土の慈悲」と比較しながらあきらかにしたい。ただ、④「浄土の慈悲」についてはひきつづき次回でも取りあげる予定。

・『歎異抄』の性格と第四章の説示のありかた。親鸞聖人のおおせを受けとめるとはどういうことか。そのことを親鸞聖人が源空聖人のおおせ（口伝の真信）をどのように受けとめられたのに学ぶ。「そらごとたわごと」のなかで「まこと」を受けとめるとはどのようなことなのか。

・第四章は、「慈悲」について、源空聖人が『選択本願念仏集』で教示した聖道・浄土という教判にもとづいて語る。

・第四章は、他者への無関心などではなく、むしろ慈悲という他者への関わり方を真摯に求めたときに生まれた痛みに基づく語り。そのなかで、もっとも深い関心のあり方として見出されたのが大慈大悲心である。では大慈大悲心は私たちにどのように具体的にはたらくのか。

・「慈悲に聖道浄土のかはりめあり」についての簡単な振り返り。

「慈悲に」――三縁（衆生縁、法縁、無縁）の慈悲――無〔有出離之〕縁の大悲
「聖道・浄土の」――自力聖道門と他力浄土門という関心の在処――「一生造悪」
「かわりめあり」――違い目か、移り変わり目か。

Ⅱ　「聖道の慈悲」について

②聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐゝむなり。	②聖道の慈悲というのは、生きと生けるものを、あわれみ、可愛がり、はぐくみ育てていこうとすることです。
③しかれども、おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。	③けれども、思いのままに助けとげるということは、きわめてまれなことです。

「聖道の慈悲というは」

聖道門（自力の関心）の立場からの慈悲

『歎異抄』は、聖覚和尚の『唯信鈔』と深い関係があるという先人の指摘。『歎異抄』では、親鸞の『教行信証』や『愚禿鈔』などで説かれる二双四重（竪超、竪出、横超、横出）の教判は『歎異抄』では問題とされない（横も超も言葉として出ない）。『歎異抄』が問題にするのは、「不審」に関わっての問題で、真仮（真実権化）の問題が中心。

・源空『選択本願念仏集』

又云わく（選択集）、「夫れ速やかに生死を離れんと欲わば、二種の勝法の中に、且く聖道門を閣きて、選びて浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲わば、[…]

（行巻引用『聖典』（第 2 版）208 頁）

・聖覚『唯信鈔』

夫れ生死をはなれ、仏道をならんとおもわんに、ふたつのみちあるべし。ひとつには聖道門、ふたつには浄土門なり。

聖道門というは、この娑婆世界にありて、行をたて功をつみて今生に証をとらんとはげむなり。いわゆる、真言をおこなうともがらは、即身に大覚のくらいにのぼらんとおもい、法華をつとむるたぐいは、今生に六根の証をえんとねがうなり。まことに教の本意、しるべけれども、末法にいたり濁世におよびぬれば、現身にさとりをうること、億億の人の中に一人もありがたし。これによりて、いまのよにこの門をつとむる人は、即身の証においては、みずから退屈のこころをおこして、あるいは、はるかに慈尊の下生を期して、五十六億七千万歳のあかつきのそらをのぞみ、*あるいは、とおく後仏の出世をまちて、多生曠劫、流転生死のよるのくもにまどえり。あるいは、わずかに霊山・補陀落の霊地をねがい、あるいは、ふたたび天上・人間の小報をのぞむ。結縁まことにとうとむべけれども、速証すでにむなしきににたり。ねがうところ、なおこれ三界のうち、のぞむところ、また輪回の報なり。なにのゆえか、そこばくの行業慧解をめぐらして、この小報をのぞまんや。まことにこれ大聖をさること、とおきにより、理ふかく、さとりすくなきがいたすところか。

ふたつに浄土門というは、今生の行業を回向して、順次生に浄土にうまれて、浄土にして菩薩の行を具足して、仏にならんと願ずるなり。この門は末代の機にかなえり。まことにたくみなりとす。」

（『唯信鈔』『聖典』（第 2 版）1093－1094 頁）

親鸞『末灯鈔』

聖道というは、すでに仏になりたまえる人、われらがこころをすすめんがために、仏心宗・真言宗・法華宗・華厳宗・三論宗等の大乗至極の教なり。仏心宗というは、このよにひろまる禅宗これなり。また、法相宗・成実宗・倶舎宗等の権教、小乗等の教なり。これみな聖道門なり。権教というはすなわち、すでに仏になりたまえる仏・菩薩の、かりにさまざまのかたちをあらわしてすすめたまうがゆえに、権というなり。浄土宗にまた、有念あり、無念あり。有念は散善の義、無念は定善の義なり。浄土の無念は、聖道の無念にはにず。この聖道の無念の中に、また有念あり。よくよく、とうべし。

浄土宗の中に、真あり、仮あり。真というは、選択本願なり。仮というは、定散二善なり。選択本願は浄土真宗なり。定散二善は方便仮門なり。浄土真宗は大乗のなかの至極なり。方便仮門の中にまた大小権実の教あり。

（『末灯鈔』『聖典』（第 2 版）736 頁）

親鸞『教行信証』化身土巻

凡そ一代の教に就いて、此の界の中にして入聖得果するを、「聖道門」と名づく。「難行道」と云えり。此の門の中に就いて、大・小、漸・頓、一乗・二乗・三乗、権・実、顕・密、竪出・竪超有り。則ち是れ自力・利他教化地・方便権門の道路なり。

安養浄刹にして入聖証果するを、「浄土門」と名づく。「易行道」と云えり。此の門の中に就いて、横出・横超、仮・真、漸・頓、助・正・雑行、雑修・専修有るなり。

[…]「横超」は本願を憶念して自力の心を離るる、是れを「横超他力」と名づくるなり。斯れ即ち専の中の専、頓の中の頓、真の中の真、乗の中の一乗なり。斯れ乃ち真宗なり。已に「真実行」（行巻）の中に顕し畢りぬ。」

（『教行信証』化身土巻『聖典』（第２版）399 頁）

・「聖道の慈悲」は小慈小悲から出発する。

（５）小慈小悲もなき身にて
有情利益はおもうまじ
如来の願船いまさずは
苦海をいかでかわたるべき

（『正像末和讃』愚禿悲歎述懐『聖典』（第２版）622－623 頁）

「ものを」

聖道の慈悲の対象を「もの」と表現。一方、浄土の慈悲は対象を「衆生」と表現することとの対比。――「人間をモノと表現するのは、対象となる人間をヒト（人）以下の一つの物体として蔑視した場合から始まっている」（『岩波古語辞典』）

「あはれみ、かなしみ、はぐくむなり」

「ものを憐れみ、愛しみ、育むなり[…]「憐む」は、ふびんに思う。同情する。「愛しむ」は、愛してめでる、いとおしむ。心を傷めるとか、悲しく思うの意ではない。「育む」は、かわいがって保護する、いたわり守る、いつくしむ、育てる。」（安良岡『全講読』118－119 頁）

「あはれみ・かなしみ・はぐくむ」心と「大慈大悲心」との関係。

「しかれども、おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。」

・「おもうがごとく」は聖道門の行者のおもうがごとくの意。ちなみに後に出てくる「大慈大悲心をもておもうがごとく」は如来のおもうがごとくの意。

・「たすけとぐることありがたし」

「助け遂ぐ」は、助けることを完遂すること。終わりまで、完全に助けぬくこと。

「有り難し」は、存在することが困難であること。まったくないとは言っていない。理論としては成り立つが、現実には成り立たないというニュアンスか。

②聖道の慈悲といふは、	④浄土の慈悲といふは、
ものをあはれみ、かなしみ、はぐゝむなり。	念佛していそぎ佛になりて、 大慈大悲心をもて、
③しかれども、<u>おもふがごとくたすけとぐる</u>こと、きはめてありがたし。	<u>おもふがごとく衆生を利益する</u>をいふべきなり。

<u>あながちに信ぜざらむは、仏なほちからほよびたまふまじ。いかにいはむや、凡夫ちか</u>

らおよぶまじき事也。かかる不信の衆生のために、慈悲をおこして利益せむとおもふにつけても、とく極楽へまいりて、さとりをひらきて、生死にかへりて、誹謗不信のものをわたして、一切衆生あまねく利益せむとおもふべき事にて候也

（『西方指南抄』巻末下）

Ⅲ　「浄土の慈悲」について

④浄土の慈悲といふは、念佛していそぎ佛になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。	【「浄土の慈悲」について】 ④浄土〔門〕の慈悲というのは、念仏して、ただちに仏（となる身）となって、（阿弥陀の）大いなる慈と大いなる悲の心によって、思うがままに生きとし生けるものを利益することをいうはずなのです。

「浄土の慈悲といふは、」

・浄土門という関心に立った慈悲の問題。――浄土門については、上記の「聖道門」の資料参照。

「念佛して」

「念仏して」とはどのようなことか。――第一章の「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんとおもいたつこころのおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり。」（『歎異抄』第一章『聖典』（第2版）767頁）によれば、「念仏する」とは「摂取不捨の利益にあずけしめられること」――第二章によれば「親鸞におきては「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」とよきひとのおおせをかむりて信ずるほかに別の子細なきなり。」（『歎異抄』第二章『聖典』（第2版）768頁）――「ただ念仏する」とは「弥陀にたすけられまいらす」ること。

「いそぎ佛になりて」

・「いそぎ」とはどういうことか。――『歎異抄』には、第五章に「いそぎ〔浄土の〕さとりをひらきなば」とあり、また第九章「またいそぎ浄土へまいりたきこころのそうらわぬは、」と出ている。

「いそぎ」……「すみやか」「とく」。「速疾に超えて」、「能令速満足　功徳大宝海」「速得成就阿耨多羅三藐三菩提」「早作仏」、「畢竟成仏」、「横超断四流」、「夫速離生死」などと表現される課題との関係。

「速」と「即」

「即得往生」というは、「即」は、すなわちという。ときをへず、日をもへだてぬなり。また「「即」は、つくという。そのくらいにさだまりつくということばなり。

「得」は、うべきことをえたりという。真実信心をうれば、すなわち、無碍光仏の御こころのうちに摂取してすてたまわざるなり。摂は、おさめ*655 たまう、取は、むか

えとるともうすなり。おさめとりたまうとき、すなわち、とき・日をもへだてず、正定聚のくらいにつきさだまるを「往生をう」とはのたまえるなり。」

（『一念多念文意』『聖典』（第２版）654－655 頁）

・「即得往生」と「即便往生」

「佛になりて」

・「いそぎ佛になりて」という「佛になる」とはどういうことか。――成仏は、「即」とは表現されない。

・「念仏成仏これ真宗」――第三章に、「願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば」と「成仏」とあり、『歎異抄』第十二章には、「他力真実のむねをあかせるもろもろの聖教は、本願を信じ、念仏をもうさば仏になる。そのほか、なにの学問かは往生の要なるべきや。」（『歎異抄』第十二章『聖典』（第２版）773 頁）と、「念仏成仏これ真宗」ということが説かれている。

往生と成仏という課題の区別。私たちは「往生極楽」の要求をもつが、「念仏成仏」を求めているだろうか。

〈自力聖道門の成仏（入聖得果）〉と〈他力浄土門の成仏（入聖証果）〉

往生については、「いそぎ」とは表現しないで、「即」という。

・仏とは如来に目覚め、如来を体現し、如来を他者に伝えるために生きる人

「大慈大悲心をもて」

大慈大悲心とはなにか。――如来の心――ここの「大慈大悲心」と⑥の「大慈悲心」との表現の異なりをどう考えるか。

この信楽は、仏にならんとねがうともうすこころなり。この願作仏心は、すなわち度衆生心なり。この度衆生心ともうすは、すなわち衆生をして生死の大海をわたすこころなり。この信楽は、衆生をして無上涅槃にいたらしむる心なり。この心すなわち大菩提心なり。大慈大悲心なり。この信心すなわち仏性なり。すなわち如来なり。

（『唯信鈔文意』『聖典』（第２版）681 頁））

『涅槃経』

『涅槃経』に言わく（師子吼菩薩品）、「善男子。大慈大悲を名づけて「仏性」とす。何を以ての故に。大慈大悲は常に菩薩に随うこと、影の形に随うが如し。一切衆生、畢に定んで当に大慈大悲を得べし。是の故に説きて「一切衆生悉有仏性」と言えるなり。大慈大悲は名づけて「仏性」とす。仏性は名づけて「如来」とす。

（『教行信証』信巻引用『涅槃経』『聖典』（第２版）260 頁）

『観無量寿経』

此の事を見れば、即ち十方一切の諸仏を見たてまつる。諸仏を見たてまつるを以ての故に「念仏三昧」と名づく。是の観を作すをば、「一切の仏身を観ず」と名づく。仏身を観ずるを以ての故に、亦仏心を見る。仏心というは大慈悲是れなり。無縁の慈を以て諸

の衆生を摂す。」

（『観無量寿経』第九真身観『聖典』（第２版）115 頁）

『浄土論註』

・「正道大慈悲　出世善根生」（『浄土論』『聖典』（第２版）145 頁）

「是くの如き巧方便回向を成就したまえり」（論）とのたまえり。「是くの如き」というは、前後の広略、皆、実相なるが如きなり。実相を知るを以ての故に、則ち三界の衆生の虚妄の相を知る*335 なり。衆生の虚妄を知れば、則ち真実の慈悲を生ずるなり。真実の法身を知るは則ち真実の帰依を起こすなり。慈悲と帰依と巧方便とは下に在り。

（『教行信証』証巻引用『浄土論註』、『聖典』（第２版）334－335 頁）

・曽我量深の「無縁の大悲」理解について――機の深信の「無有出離之縁」と無縁の大悲

『本願の仏地』（1933 年）（「宗教的信が内に展開する願の世界」1927 年 11 月広島市三日間六講の記録。『仏座』に２回にわたり連載。）

しからば無縁の大悲といふことは何かといふと、私は無有出離之縁の大悲だと思ひます。出離の縁のない大悲であります。……無縁の大悲といふことは、助かる縁手懸りのつきはてた、さういふものを憐れむのが無縁の慈悲だ、……永遠に浮かぶ瀬のない者を憐れむのを無縁の大悲といふのであります。……私は悲といふ字はやはりかなしみである、あはれむとはかなしむことなり。……法蔵菩薩が一切衆生の罪を自分の双肩に荷うて立つて行かれる心持といふものは、もう永遠に浮かぶ瀬がないところの深き悲しみであります。

（『曽我量深選集』五・320－321 頁）

・機の深信

「二者深心。」（観経）「深心」と言うは即ち是れ深信の心なり。亦二種有り。一には、決定して深く「自身は現に是れ罪悪生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して出離の縁有ること無し」と信ず。二には、決定して深く「彼の阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受して、疑無く慮無く、彼の願力に乗じて定んで往生を得」と信ず。」

・大慈と大悲

往相回向の大慈より　還相回向の大悲をう

如来の回向なかりせば　浄土の菩提はいかがせむ

（『正像末和讃』『聖典』（第２版）616 頁）

仏智不思議をうたがいて　善本徳本たのむひと

辺地懈慢にうまるれば　大慈大悲はえざりけり

（『正像末和讃』『聖典』（第２版）618 頁）

・小慈小悲

（５）小慈小悲もなき身にて　有情利益はおもうまじ

如来の願船いまさずは　苦海をいかでかわたるべき

（『正像末和讃』愚禿悲歎述懐『聖典』（第 2 版）622－623 頁）

よしあしの文字をもしらぬひとはみな　まことのこころなりけるを
善悪の字しりがおは　おおそらごとのかたちなり
是非しらず邪正もわかぬ　このみなり
小慈小悲もなけれども　名利に人師をこのむなり

已上

（『正像末和讃』『聖典』（第 2 版）626 頁）

「おもうがごとく衆生を利益する」

この「おもうがとごく」は如来のおもうがごとくである。（曽我量深）――衆生を利益するとは、どのようなことか。――仏道が精神世界の事実をあらわすのであるから、利益とは「摂取不捨」という人生の意味を与えることである。

（21）如来の回向に帰入して　願作仏心うるひとは
自力の回向をすてはてて　利益有情はきわもなし

（『正像末和讃』『聖典』（第 2 版）612 頁）

「をいうべきなり」

この「べき」は当然の助動詞であるが、どうして「利益すべきなり」といわずに、「利益するをいうべきなり（言ってよいのである）」という表現をとるのか。――安良岡は「と言い切っている所に、親鸞の把持している信念の強さが認められる」（安良岡一二三頁）という。その利益は、信心の行者における現益ではなく、成仏という当益についての言説であるからだろうか。

②聖道の慈悲といふは、	④浄土の慈悲といふは、
ものをあはれみ、かなしみ、はぐゝむなり。	念佛していそぎ佛になりて、 大慈大悲心をもて、
③しかれども、おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。	おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。